

秀 賞



朝日に向かって

青森県八戸市立長者中学校

二年 浅沼妃夏

「本当に大丈夫なの。」

そんな不安げな母の質問に、私は明るく

「大丈夫だって。私、そんな弱くないよ。」

そう言って、私は母に笑顔を向けた。

私は、中学二年生になると名字が変わる。親が再婚したからだ。そして、名字を変えるか、変えないかという話をしていった。母は、私の名字が変わって同年代の子が何か言わないかと心配していた。

「無理してない？ 高校から名字を変えてもいいんだよ。」

「無理はしてないよ。本当に大丈夫だから。」

私は、親が再婚したことを心から祝福している。いつも頑張っている母には、幸せになってほしいし、父も大好きだ。私は、そんな二人を自分のことで不安にさせたくなかった。実際、それほど名字が変わることに不安は感じていなかったから、母は大ききだなどと思っただけだ。

「妃夏が苦しい思いをするなら、名字なんて変えなくていいんだよ。」

母が優しい声で言った。

「私は本当に平気だから、むしろ、名字が変わった方が嬉しいな。」

でも、本当は……。それは言葉にはできなかった。言いたくなかったのだろう。本当は、心のどこかに不安があるということ……。でも、私なら大丈夫だろう。きつといつも通りにふるまえる。だって、自分自身は何も変わっていないんだから……。自分に言い聞かせながら、私は布団に潜ったのだった。

翌朝、日差しが私を起こすかのように輝いていた。そうだ。今日は……。新しいクラス。新しい名字。外に出ると、朝日がいつもより輝いて見えた。大丈夫。私はきつと、いつも通りにできる。そんな気がした。私は二組だった。「浅沼」なので、私は女子の名簿一番だった。教室に入り、おもむろに前の席に座ると友だちが声をかけてきた。

「あれ。妃夏ってその席だっけ。」

すると、女子の大半がこちらを見て話しかけてきた。私は事情を説明した。何て言われるだろうか。ドキドキしながら友だちの返事を待った。そうしたら、「おめでどう。お母さんに『おめでどう』って伝えておいてね。」

驚きの反応だった。予想を超える嬉しい返事だった。でも、まだ私が名字が変わったことを知らない人がいるかもしれない。私は、自己紹介で自分の名字が変わったことを言おうと思った。先生は、

「私が言おうか。それとも、自分で言う？」

と聞かれた。もちろん私は、自分で言うことを選択した。ここで先生の優しさにすがっていいは、自分は前に進むことができないかと思ったからだ。私はみんなに向けて、ありのままに話した。

「浅沼妃夏です。実は、私は二年生から名字が変わります。」

声は震えていないだろうか。目はしっかり前を向いているだろうか。いつもあたり前になっていることが、いつもよりできていないように感じた。

「ですが、中身は変わらないので気軽に話しかてくれたら嬉しいです。」

言えた……。私は達成感で満ちていた。きつと、みんなにも伝わっただろう。さっそく効果が出てきたのか、みんなも話しかけてきた。

「妃夏って名字変わったんだね。」

「浅沼」かあ。珍しい名字だね。」

私が不安に思っていたことは何も起きなかった。クラスの温かさを改めて感じて、私は仲間とはとても心強く、大切なものだと実感した。

これからも、浅沼として過ごしていく中で、大事にしたいことが二つある。一つ目は、仲間を大切にすることだ。どんなことがあっても、温かく受け入れてくれたのは、クラスメイトとしての意識や、優しさがあるからなのだろう。私は、自分もその一人として役に立ちたいと思った。二つ目は、差別のない広い心を持つことだ。道徳の授業でも差別することがいじめにつながると学んでいる。私は、自分と違うという身勝手な理由や考えからいじめが起きるのではないかと思っている。人との違いを受け入れることで、人はもっと仲良くなれる。受け入れるということは、とても大事なことで学んだ。

浅沼。これが私の名字。何かが変化したことはない。いつもと変わらない日常だ。たまに、前の名字で呼ばれるけれど、そのときはしっかり言うことと決めている。

「浅沼だから。」

と。私は今日も朝日に向かって歩き出す。